

は　じ　め　に

昭和58年度の研究所の活動をふりかえると、第一に、平城宮跡第二次大極殿地区の発掘成果が注目される。第二次大極殿地区では、これまでに大極殿基壇および後殿などの発掘を実施してきた。58年度は、大極殿前庭部や南門・回廊部分の発掘をおこない、4期にわたる棧敷や幢を仮設した遺構、閤門、回廊などを検出した。これによって、宮殿々舎の配置の変遷が知られるようになっただけでなく、いままで文献から推定するのみであった8世紀後半の宮廷儀礼の実態を、実地の遺構から考察できる可能性が生れた。平城宮跡発掘調査の一つの時期を劃する成果というべきであろう。

第二は山田寺東回廊の発掘成果である。57年度に、予想だにしなかった創建時回廊が倒壊したままの状態を検出された。58年度には、そこから回廊東南隅までを発掘し、叉首以外の回廊の部材全てを検出できた。法隆寺西院伽藍に加え、新たに7世紀半頃の木造建築の実態を明らかにできたことは、わが国古代建築史上稀有のことと評価される。目下、検出した部材の保存処理体制および機器の充実が急務となっている。

第三は石神遺跡の発掘成果であろう。平城京、藤原京、飛鳥地域においても着々と成果を挙げつつあるが、なかでも、須弥山石・石人像出土地の西隣で、二回にわたる堅固な囲障遺構が検出されたことは、飛鳥寺・水落遺跡との関連もさることながら、発掘区以北の7世紀後半の遺構の理解に大きな示唆を与えるものと考えられる。

第四に、埋蔵文化財センターで実施している年輪年代学研究は、わが国の年輪年代学の確立に今一步のところまでせまったものと自負しており、また、古代史データ活用システムも実用の域に達し、情報機器の活用という永年の夢が実現しつつある。

その他、多岐にわたる研究が、研究員の努力により着々と進行している一端を、本年報によって御理解いただければ何よりと考えている。とはいえ、日進月歩の学問の世界で、現状への安住は許されない。近年の人員と予算における厳しい事情に如何に対処すべきか、きびしい御批判とさらなる御鞭撻のほどを乞い願うものである。

昭和59年12月25日

奈良国立文化財研究所長

坪　井　清　足